

コロナ禍における特別な配慮を必要とする子どもへの支援 II

—Web 会議システムを活用した特別な配慮を必要とする子どもへの支援に向けて—

吉川 寿美¹⁾ 那須 信樹²⁾ 岡本 満江³⁾

Support for Children with Special Needs During the COVID-19 Pandemic II

—Using the Web Conference System—

Kazumi Kikkawa Nobuki Nasu Mitsue Okamoto

1. 問題と目的

現在、保育現場における特別な配慮を必要とする子どもへの支援として、「障害児等療育支援事業」や「保育所等訪問支援」、巡回相談といわれるものがある。巡回相談とは、“「専門家」とされる者が、ある地域内の幼稚園・保育所あるいは学校を巡回して、在籍する幼児児童生徒のうち特別な配慮を必要とする子どもに関して、担当する教諭・保育者等と相談を行うこと”（片岡, 2016）とされている。現在行われている巡回相談は、“国一律の制度ではなく、地方自治体がそれぞれ独自に行っているものであり、現在に至るまで定められた内容や相談員の資格要件があるわけではない”（片岡, 2016）ため、回数や専門家の専門性はさまざまであり、そのあり方や位置づけは自治体によって異なっており、地域間格差が大きいとの指摘もある（別府, 2016）。このように自治体によって異なる巡回相談ではあるが、支援を必要とする子どもの増加により保育現場からは巡回相談への要望や期待も高い。

その巡回相談も新型コロナウイルス感染症流行によりこの2年間、幾度となく中断されることを余儀なくされた。乳幼児期は子どもにとっても保育者にとっても一日一日が貴重な時間である。その貴重な時期の支援が滞ることなく実施されるためには、従来の訪問型の支援に加えて、新たな支援方法の一つとし、新型コロナウイルス感染症流行により活用されてきたweb会議システムを用いることができないかと考えた。そして、それは新型コロナウイルス感染症流行時に限らず、訪問先までの移動時間を要するところや専門機関が遠

隔地にしかないような地域などにおいてもWeb会議システムの活用は有効な支援の手立てとなることも期待できるのではないかと考えた。

そこで、まずは、新型コロナウイルス感染症流行による巡回相談等、専門機関との連携における課題について明らかにするとともに、新型コロナウイルス感染症流行により教育現場等においても活用されてきたWeb会議システムを活用し、特別な配慮を必要とする子どもへの保育において支援者と保育者がどのように協働していくことができるか検討を行った（吉川・那須, 2021）。

その結果、保育現場における特別な配慮を必要とする子どもに関する専門機関との連携への影響については、想定していたように新型コロナウイルス感染防止のため園への訪問や、療育センター等の専門機関の外来療育受診が滞っていることが明らかとなった。試行的要素も多く、限定された特定の園での調査ではあったが、このことは、多くの園でも同様の課題を抱えていることを示唆する結果ではないかと推察される。

併せて、訪問型ではない新型コロナウイルス感染症流行により教育現場等においてさまざまに活用されてきているWeb会議システムを活用した支援方法への期待については、以下のように挙げられた。

- ・新型コロナウイルス感染症流行下であっても感染リスクに左右されることなく連携できること。
- ・平時においても移動時間の削減ができること。
- ・対面の場合は対象児が訪問日に欠席であると対応できないが、欠席であっても対応可能であること。

執筆者紹介：¹⁾ 中村学園大学教育学部児童幼児教育学科 ²⁾ 中村学園大学教育学部児童幼児教育学科 ³⁾ 中村学園大学教育学部児童幼児教育学科非常勤講師

別刷請求先：吉川寿美，〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1

- ・担当保育者だけでなく複数の保育者が参加することも可能となり、聞き間違いや聞き逃しがなくなったり園全体での共通理解にも繋がること。

一方で、Web 会議システムを活用することについての課題も挙げられた。

- ・対象児を直接見ることができないため、特に新規の対象児の場合、子どもの様子を伝える際の難しさがあること。
- ・具体的な手立てなど実際に見ることができないこと。
- ・Web 会議システム利用における個人情報の保護についての懸念。

一部、園訪問や外来受診が再開してきているものの新型コロナウイルス感染症流行は、未だその終息が見通せない中、感染拡大が起きると中断せざるを得ないなど感染状況に左右される状況は続いている。

そこで、本研究では、吉川・那須 (2021) の結果を基に相談支援への手がかりとして、実際に Web 会議システムを活用し映像を用いた職員研修会を実施し、その有効性と課題について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査方法：アンケート調査

研修後、質問項目をメールにて送付し回答を得た。

(2) 調査内容

1 回目

- ・Web 会議システム活用の利点と課題

2 回目

- ・WEB 会議システムを使用し画面共有をすることについて
- ・訪問型の支援と Web 会議システムを活用した支援の違いそれぞれの利点や課題等
- ・今後に向けて期待すること

(3) 調査対象

1 回目：A 保育園 園長 B・保育士 C・保育士 D

2 回目：A 保育園 園長 B・保育士 C・保育士 E
保育士 D 退職のため 2 回目は保育士 E が参加

(4) 調査時期

1 回目：20XX 年 12 月

方法：撮影された映像を事前に筆者が見ておき、その後、zoom の画面共有にて園長および保育士 C・D と一緒に試聴、検討を行った。そして、研修後にアンケートを依頼。

2 回目：20XX 年+1 年 6 月

方法：事前に撮影された 2～5 分程度の保育場面の映像 3 場面を zoom の画面共有にて園長および保育士 C・E と一緒に試聴、検討を行った。1 回目同様、研修後にアンケートを依頼。

(5) 倫理的な配慮

画面共有の際は、関係者以外が見ることができないよう個室で試聴、またアンケート調査依頼に

ついては、関係者に口頭での承諾依頼、了承を取り付けたのち、プライバシーの保護に務め個人が特定できないように配慮した。また、対象園は、保護者に事前に研修会等への映像等提供の説明許可を得ている。

3. 結果

(1) 1 回目について

① Web 会議システム活用の利点

- ・移動の時間がなく実施できる。
- ・一人ではなく複数で視聴し、情報の共有が図れる。
- ・訪問型では園側が「気になる」「困る」対象児の行動が必ずしも訪問日に起きないこともあるが、動画を事前に撮影することでターゲットとする行動を確実に共有できる。
- ・動画を一緒に見直すことで新たに改善すべきことがみつかるとのこと。
- ・予めビデオ撮影することで客観的に自分の保育をみることができ振り返りにも繋がる。
- ・思っていた以上に手軽にできる。

② Web 会議システム活用の課題

- ・限られている時間の中では、予め何について聞きたいかを打ち合わせておくスムーズにいくのではないかと。

(2) 2 回目について

① Web 会議システムで画面共有をすることについて

(利点)

- ・客観的に自分の保育を見て振り返ることができる。
- ・何度も再生したり巻き戻したりと、ピンポイントで場面を見ることができる。
- ・支援者と園側の共通認識が視覚的にわかるのでとても良い。
- ・子どもの気になる行動などを何パターンか準備することができる。
- ・気になる子どものことだけでなく、クラスのことや周りの子どもへの影響なども知ることができる。
- ・子どもの様子をその都度伝えることができる。
- ・子どもの姿をそのまま共有することができる。
- ・その場面にあった支援の方法等話をすることができ、振り返ることができる。
- ・構えなく自然体で、普段の子どもたちや保育者の姿がわかる。
- ・その日だけでなく別日の様子も画面共有で伝えることができる。
- ・感染症に左右されない。
- ・該当児が欠席しても支障がない。
- ・自身の保育を振り返ることができ、子どもにあった支援の方法を知る事が出来る。

〈課題〉

- ・今回はランダムに園側が画像を選んだが、どの場面を共有するか、担任が悩んでいる所と支援者の視点が違うのではないか。
- ・子どもの行動について、動画に撮れていない部分で何かきっかけがあったのではと思う。そのため、どの部分を共有動画として切り取るのか園担当者の主観も入るのではないか。
- ・その場の雰囲気、周りの子どもの様子等がわかりにくい。

②訪問型と Web 会議システム活用との違い

〈訪問型の利点〉

- ・ほかの子どもも見てもらえる。
- ・画像にはわからない園の環境が伝わりやすい。
- ・保育者と子どもの関りだけでなく、クラス的环境や周りの子どもたちの状態なども見てもらえ、その場の雰囲気もわかる。

〈訪問型の課題〉

- ・日程調整やフィードバックの時間など、時間確保が難しい。
- ・感染症流行などで、日程変更又は中止せざるを得ない。

③Web 会議システム活用で期待すること

- ・訪問型の場合、観察が終わった後フィードバック助言をもらうが、“あの時に…や、あの場面で…”と言われることが多い。しかし、支援者と視点が違うと共通理解しにくい、Web 会議システムを活用した場合同じ場面を繰り返し見たり、他の場面も気が付いたり利点が多く感じられ Web 会議システム活用の可能性を感じた。

4. 考察

(1) Web 会議システムを活用した相談支援の可能性

Web 会議システムを活用した相談支援の利点として、実際に Web 会議システムを活用した今回においても前回の調査(吉川・那須, 2021)同様、移動時間が削減できること、対象児が訪問日に欠席であっても対応できること、加えて、動画を事前に撮影することで園側がターゲットとする行動を確実に共有できることが挙げられた。別府(2016)は、保育者は、「気になる」姿がどういう原因から来ているのかを早く知り、「気になる」行動を早く解決するためにはどうすればよいかを教えてほしいという願いをもって巡回相談に臨むこともあると述べている。そのためには、実際の様子を見てほしい、保育者がターゲットとする行動を確実に見てほしいという思いが保育者には強くあり、今回のような結果に繋がったのではないだろうか。

また、Web 会議システムを活用した場合、複数で参加できるということも前回同様に挙げられた。また、動画

を一緒に見直すことで新たに改善すべきことがみつかる、客観的に自分の保育をみることで振り返りにも繋がるといった意見も挙げられた。さらに、訪問型では保育後にフィードバックがなされるが、Web 会議システム活用した場合は、保育者と支援者が同時に映像を見て協議することで共通理解しやすいとの意見もみられた。向井(2017)は、“保育者は自分自身の考えや子ども理解を語り、それを共有するプロセスにおいて自分の保育を振り返りながら、さまざまな気づきを得ていく。”と述べている。そのような意味では、訪問型での支援者によるフィードバックも保育者自身の保育のあり方や子どもへの関わり方がどうであるのかの気づきに繋がる。一方で、訪問型の場合、保育者が第三者的視点で視覚的に自分自身の姿を見ることはない。保育において保育者自身が保育をどう改善したいのか、そのためには何がどうなっているのかを保育者自身が自覚することが大切ではないかと考える。そのような意味では、映像を通して画面を共有することで、保育者自身が対象児だけでなく、そこにかかわっている自分自身の姿を客観的に捉えることは大きな意義があるのではないだろうか。さらに、複数で参加することで、他の保育者にとっても、また園全体の共通理解も得やすいのではないだろうか。

前回の調査(吉川・那須, 2021)で懸念された対象児を直接見ることができないため、特に新規の対象児の場合、子どもの様子を伝える際の難しさや、具体的な手立てなど実際に見ることができないということが挙げられていた。今回の対象園は、一度も訪問したことがない新規の園であったが、事前にビデオで保育場面を撮影し、画面を通し共有することで対応することが可能であったと考える。

今回の回答では、Web 会議システムを活用した場合、訪問型と異なり、構えなく自然体であり、普段の子どもたちや保育者の姿が分かるとの意見もあった。訪問型の場合は、対象児にかかわらず子どもたちにとって馴染みのない訪問者は特別であり日頃の様子と違ってくることは当然ある。保育者も同様で、いつも一緒に保育をしている保育者ではない外部の人から、ましてや保育者にとっては専門家という何かしらの大きな存在の人に見られているといった意識も出てくるであろう。そうすると子どもへのかかわりにも変化をもたらさないとも限らない。事前に動画を撮影しておくことは、普段の保育場面の共有ができ課題も確認しやすいのではないかと考えられる。特に、今回の対象園は、日常的に保育の様子を映像に収めている園であるため、子どもも保育者もビデオ撮影を意識することなく普段の姿をみることでできたと思われる。

(2) Web 会議システムを活用した相談支援の課題

予め何について聞きたいかを打ち合わせておくに限

られている時間の中ではスムーズに行くのではないかと回答があった。今回2回とも1時間と時間を限定して実施した。訪問型においても時間の制限はあるが、Web 会議システムの場合、画面を通してであるため長くても60～90分程度ではないかと考える。訪問型であれば、観察の時間がありその後協議の時間となるところをWeb 会議システムを活用した場合は60～90分という限られた時間の中で、何を共有するのかということも課題である。

一方で、訪問型の場合、観察の時間とフィードバックの時間にはかなりの時間を要するため、今回の回答にみられるように時間確保が難しく相互の日程調整がなかなかうまくいかない場合も見受けられる。その点、Web 会議システムは観察時間の代わりに撮影した映像を短くても複数場面見ることによって相互の拘束時間を短縮でき全体的に短時間で実施出来るということも手軽さの一つではないだろうか。現在、訪問型の訪問回数の少なさも課題であることを考えると、一回の長さが短くても回を重ねることで保育者の様子や園全体の様子も見えてくるであろうし、また保育者との関係性も築きやすくなるのではないかとと思われる。

また、画面共有に関して、どの場面を共有するか、共有動画としてどの場面を切り取るのか園担当者の主観も入るのではないかと意見もあった。確かに、どの場面を切り取るのか保育者や園の意向が強くなってしまふ可能性は十分に考えられる。しかし、選択された場面は、保育者が現在、課題と思っている解決したい場面、あるいはうまくいっていると考える場面であるだろう。三山(2016)は、「保育者が自分で主体的に保育を考え、自立的に実践できるようになること」が保育支援の中心となる。」と述べている。また、真鍋(2010)は、「外部専門家への信頼関係とは裏腹に、専門家への過度の依存体質をも強めてしまう可能性がある」と指摘し、「巡回相談での助言による解決に頼るだけでなく、保育所内部で継続的に情報収集や支援方法を検討することに重きを置くべきであろう」と述べている。保育者自身が選んだ場面を外部の支援者と共有することで、保育者自身がどこが課題であるのかをより明確にしたり、自分の見立てについての不安を解消したりすることに繋がるのではないだろうか。保育者が「気になる」としている対象児の行動は、対象児にかかわる保育者や所属集団であるクラスの子どもの関係性から生じている場合もある。画面共有をして協議することで、保育者自身が「気になる」に囚われるのではなく、その行動の背景を理解するきっかけを作ることにもなるであろう。そのような保育者の子ども理解の変化は、対象児の捉え方やかわりに変化をもたらし、さらには、保育者同士で検討し合う手がかりになることも期待できるのではないかと考える。

今回の調査で、訪問型は「ほかの子どもも見てもら

える」がWeb 会議システムを活用した場合はそれができないという回答がみられた。保育者は、障害児保育対象ではない子どもへの対応のみならず、その保護者への伝え方やかわり方に苦慮していることが多いことが推察される。三浦(2020)は、他機関との連携に繋げるためには、保育者と保護者の直接的なやりとりだけでは不可能なことも多く、専門家の介入は必要不可欠であると述べている。そもそもWeb 会議システム活用にかかわらず訪問型も連携にあたっては保護者の理解が必要である。しかし、障害児保育対象ではない子どもの場合は特に、保護者の理解を得ることが難しい場合も少なくない。

保護者にとって、外部の専門機関は特別なものであり、保育者に勧められることは拒否感に繋がってしまうこともある。また、そのような場所に保護者自身が予約連絡をすることはハードルが高いものと思われる。さらには、予約連絡を入れたとしてもすぐに予約がとれるわけではないため先延ばしになってしまうケースも見受けられるため、保育者の焦りや困難感を強めてしまうこともある。園内に外部支援者が訪問する際に保護者が相談できることができれば、もう少し気軽に相談も出来やすいのではないだろうか。しかし、訪問型の場合、保護者が相談したいと思ったタイミングで訪問ができるかという難しい側面もある。機を逃さず支援に繋げるには、移動時間等の調整が少なくてすむWeb 会議システムという形も一つの選択肢になり得るかもしれない。

5. まとめ

今回、新型コロナウイルス感染症流行により広まったWeb 会議システムを用いて実際に映像を共有した職員研修会を実際に行い、今後の相談支援の可能性について検討を行った。今後も新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、保育現場における特別な配慮を必要とする子どもへの支援が滞ってしまう可能性はまだある。その場合、外部の支援者が、直接保育現場に出向くことが難しくとも、電話だけでなく、Web 会議システムを活用することによって、顔を合わせた連携が可能であり、そのことは保育者の安心感に繋がると思われる。そして、それは、新型コロナウイルス感染症流行下だけでなく、専門機関が遠隔地にしかないような地域においても、今後、従来の訪問型の支援に加えて新たな支援方法になり得るのではないかと考える。

今回、動画を撮影し場面を共有するという方法で実施した。動画撮影に関しては、筆者自身、支援先が遠方の場合は、これまでも対象児が欠席の可能性も視野に入れ、事前に動画を準備してもらい巡回相談を実施したケースもある。現在のように新型コロナ感染症等のように何か社会情勢的に訪問できない状況になっても支援を継

続できるだけではなく、訪問型においても保育場面の観察に加えておくことは、保育者が懸念する対象児が欠席の場合であっても支援の実施が可能となるのではないだろうか。

巡回相談として実際の保育現場を訪問し子どもや保育の現場を見て行う「訪問型」による連携も必要であるが、「訪問型」「Web 会議システム活用」どちらか一方ではなく、それぞれの利点を活かした支援についても今後、更なる検討が必要であろう。また、Web 会議システムを活用した支援については、時間や回数、どの場面を共有することが有効であるのか、そして、専門機関に繋がっていないケースや保護者の了解をどのように得て行うのか実際の実施に向け検討を続けていきたい。

引用・参考文献

- 別府悦子(2016). 保育者の労苦に共感し保護者と連携する巡回相談. 浜谷直人・三山岳(編著), 子どもと保育者の物語によりそう巡回相談 - 発達がわかる, 保育が面白くなる -. ミネルヴァ 書房, pp. 191-203.
- 片岡基明(2016). コンサルテーションとしての保育所・幼稚園での巡回相談に関する研究動向. 京都女子大学発達教育学部紀要, 12, 41-47.
- 吉川寿美・那須信樹(2021). コロナ渦における特別な配慮を必要とする子どもへの支援 - Web 会議システムを活用した保育者との協働による取組みの検討 -. 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 13, 72-76.
- 真鍋 健(2010). 障害のある幼児に関する保育所巡回相談の評価 - 市における保育者と保育コーディネーターへの質問紙調査より -. 幼年教育研究年報, 32, 43-52.
- 三浦 萌(2020). 保育者による「気になる」子どもの保護者支援についての文献による概観. 生涯発達心理学研究, 12, 3-10.
- 向井 美穂(2018). 保育所の巡回相談において「対話」が果たす役割 - 保育者の子ども理解を支える巡回相談機能の検討 -. 十文字学園女子大学紀要, 48-1, 33-42.

謝辞

本報告の作成にあたり、A 保育園から掲載許可を快くいただくとともに、たくさんの情報を提供していただきました。厚くお礼申しあげます。